# 僕の隣の悪魔

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の隣の悪魔

【Ｎコード】
Ｎ８２９６Ｑ

【作者名】
ハル

【あらすじ】
幽霊の見える普通（？）の高校生・翔太が、悪魔に取りつかれた。そのせいで、翔太は特殊な人達の集まった学校に通う事になってしまった・・・・・・。

# 悪魔が来ました

僕の家には悪魔がいる。

今時、そんな非現実的な事なんてあるはずが無いけれど、実際、僕の家には悪魔がいる。名前は、色葉（いろは）。僕の部屋の押し入れに、余っていた布団を敷いて、そこで寝ている。色葉のせいで、僕は転校することになった。桜咲高校（さくらざきこうこう）から、超常学園（ちょうじょうがくえん）に。超常学園は、幽霊に取り付かれたとか、魔女とか、幽霊が見えるとか、そういったものを専門にしているのだ。

実は僕も、幽霊が見える。だから色葉が見えたのだ。普通の人間には見えない。

色葉と出会ったのは、二ヶ月前――――。

◇　◇

「・・・・・・見つけた。人間」

「・・・・・・は？何？」

月曜日の放課後。部活も無いのに夕方になってしまったのは、友達と話していたからだ。いつもの道を歩いていると、黒い髪、首にスカーフ、裾の長い黒の服着て、それに・・・・・・黒い羽？

「・・・・・・私は、悪魔。色葉」

「イロハ？お前の名前か？って、悪魔！？」
「・・・・・・色葉は、私の名前。・・・・・・悪魔」
悪魔。人の心をまよわし、悪にさそうものの事か？そう、前に辞書で見たことがある。でも、その悪魔が何故ここに？
「で、その悪魔が何の用だ？」
聞くと、イロハ？が答えてくれた。
「・・・・・・悪魔界から追放された」
・・・・・・追放？
「お前は一体何をしたんだ」
「・・・・・・分からない」
「分からないのか！？」
一体何をしたんだ。
「んで？僕に何の用なんだよ？」
「・・・・・・貴方の家に泊めてほしい。一年でいいから」
ちょっと待とう。一年は長いぞ？
「・・・・・・一年の約束で追放された」
追放に約束があるのか・・・・・・。

このように（色々あって）、色葉は僕の家で暮らす事になってしまった。

## 悪魔が来ました（後書き）

どうも、ハルです。初めての小説なんで、おかしいところがあるかもしれませんが宜しくお願いします。あ、でも本は結構読んでるんで経験値と想像力は無駄にある↑

# 超常学園

しまった、見つかった。
「翔太(しょうた)、転校」
「は！？」
「翔太、転校。アンタ、幽霊とか悪魔とか見えるんでしょ」
「そうだけど・・・・・・」
「転校先は、超常学園よ」
「嫌だっ！！絶対に嫌だっ！！」
「どうしてそんなに嫌がるの？小野さんとこの和樹君だって超常学園よ」
「そうだけど・・・・・・」
小野和樹(おのかずき)。一年の時に転校した。幽霊に取り付かれたって聞いた。
『なぁ、翔太。お前幽霊とか見えるんだろ？なら俺の幽霊お祓いしてくれよ』
『遠慮しとく。見えるだけで、お祓いとかはできない。じゃあな、超常学園でも頑張れよ』
『翔太～！裏切り者～！』
最後に話した会話はこれだ。そう、僕は幽霊とかは見えるけど、お祓いなんてできない。だから色葉がいるんだよ・・・・・・。
「あ、手続きは済ませておいたからね」
「くっ・・・・・・！！」
「明日からは超常学園に行きなさい。制服、ハンガーに掛かってるからね。それじゃ、行ってきまーす♪」
母さんは、仕事に出掛けていった。今日は夜の勤務だ。階段を上って自分の部屋に入ると、
「ん、母殿は仕事に出掛けられたのか」
色葉に話し掛けられた。色葉は僕の家で暮らし初めてから随分喋

り方が変わった。何故なんだ・・・・・・？
「それで、翔太は転校か」
お前の所為だ。
「名前は超常学園といったか」
なんでそんな事まで？
「翔太の友達も超常学園だそうだな」
「なんでそこまで知ってるんだよ・・・・・・」
「調べた。翔太の、身長や体重も」
「・・・・・言ってみろ」
色葉は少し間を置いて、
「中野翔太（なかのしょうた）（１７）。身長は１６３ｃｍ、体重５３ｋｇ。趣味は読書、得意な教科は国語、苦手な教科は化学。好きな女子はいない」
と言った。・・・・・どうやって好きな女子の事調べたんだ。
全く、これだから嫌なんだ、幽霊とかが見えるっていうのは。相手が面倒だ。

そんなこんなで翌日、火曜日。

超常学園は山の中にある。だからだろうか。
「ここ、どこだ？」
もう一度言うが、超常学園は山の中にある。学園の敷地面積はとても広い。だから、僕は職員室に行く道が分からない。
「しょ、職員室・・・・・」
「見ろ翔太。あそこに保健室があるぞ」
「そっか。保健室にはたいてい先生がいるからね」
僕と色葉は、保健室に向かった。
中を覗くと、童顔で胸が大きい、先生（？）がいた。先生（？）が首を傾げて「どうしたの？」と言ったので聞きたかった事を聞いた。
「あの、僕転校してきたんですけど職員室ってどっちですか？」

「ふぁ・・・・・・えと、職員室はあっちです」
左を指す先生（？）。そこには・・・・・・、
「そっちは玄関ですけど・・・・・・」
玄関があった。
「ひゃ、ごめんなさぃぃ・・・・・・間違えましたぁ（泣）職員室は真っ直ぐだよぅ・・・・・・」
この人本当に先生なんだろうか。心配。
「あの、貴方は先生ですよね？」
聞いてしまった・・・・・・。
「ふぇ？はいそうですょ。私、星崎奈央（ほしざきなお）です。奈央先生って呼んでください。皆呼んでくれてますよ～」
「奈央先生・・・・・・奈央先生ね。分かりました。あ、ありがとうございました」
きちんとお礼を言う。
「あら・・・・・・？後ろの子、悪魔よね？」
「そうですけど・・・・・・」
「悪魔の色葉だ」
「そう・・・・・・じゃあ、頑張ってね」
奈央先生と別れた。

『職員室』と札がついている。やっとついた。
「失礼します」
中に入ると、
「貴方が中野翔太君よね？私が二年のクラスを担当する山中よ」
山中先生がすぐに声をかけてくれた。
「案内するわね」
「ありがとうございます」
クラスは、渡り廊下を通って、階段を上った所にあった。
先生がドアを開け、言った。

「静かにしなさい！今日は転校生がいるのよ。みっともない所を見せてはいけません！」
先生がそう言うと、一瞬で五月蝿かったクラス内は静かになった。凄い人だ・・・・・・。
「中野君、入ってきて」
「は、はい」
やっぱり緊張するな。入ると、色葉も一緒に入ってきた。
「自己紹介をしてもらえるかしら。皆も、中野君が終わったら言ってもらいます」
「はい。・・・・・・中野翔太です。桜咲高校から転校してきました。幽霊が見えます。こっちは、悪魔の色葉です」
「色葉だ」
色葉は短く挨拶を済ませた。
「次。小野君から順番に」
「はーい。小野和樹です。幽霊に取り付かれました☆って、翔太ぁ！？」
驚いた表情の和樹。なんで今？
「気を取り直して、続き～！俺の後ろにいるのが幽霊の菜穂（なほ）ちゃん～」
菜穂という名前の幽霊は、金髪でツインテールの髪型をしていた。
「この幽霊はツンデレか、小野」
「あ、色葉ちゃん～。多分ツンデレだよ」
つり目が印象的だ。睨んできたから。
「はい、次」
「このクラスの委員長の原泉（はらいずみ）です。魔女で、水を使う魔法です。あ、この猫はクオウよ。よろしく、翔太君。泉って呼んで、堅苦しいのは好きではないのよ」
「よろしく・・・・・・」
泉は、メガネをかけている。さらさらの髪の色は、茶色。切れ長の目。肩には、クオウがいる。トラ猫だ。

「次」
「安藤慶介(あんどうけいすけ)です、ヨロシク～、翔太。慶介って呼んでよ」
「う、うん」
慶介は凄いフレンドリーな性格らしい。・・・・・・なんかドSな雰囲気が伝わってくるけど。
「はい、次」
「三神雅(みかみまさ)。・・・・・・雅でいいから」
「よ、宜しく」
「雅はムッツリスケベだぞ～！」
和樹からのいらない情報。雅は物静かで、クールな印象を受けた。
「次」
「神崎七穂(かんざきななほ)です！ボクの事は七穂って呼んでねぇ☆よろしくぅ翔太っ」
「・・・・・・宜しく、七穂」
七穂は、制服を着くずしたショートカットの女の子。テンションが高い、元気な印象だ。
「翔太、ノリ悪い」
「悪かったね」
「次」
山中先生は早く終わらせたいのか、僕らの会話を遮った。
「南雲琴音(なぐもことね)です・・・・・・。翔太君、宜しくお願いします・・・・・・。琴音って呼んでください・・・・・・。」
「うん、よろしく」
琴音はとても大人しい、大人っぽい雰囲気の子だ。なんというか・・・・・・綺麗。“お嬢様”という言葉が浮かんだ。少したれ目の目、さらさらの髪、整えられた制服。隣には―――妖精？
「翔太、お前見惚れてただろ」
「ち、違―――」
け、決して見惚れていた訳ではない！・・・・・・ちょっと妖精が、ね。

「・・・・・むぅ」
その妖精が僕の方に近づいてきて、言った。
「お前、ご主人様をあーゆー目で見ていただろ！」
「あーゆー目って何！？」
多分それは誤解だと思います。
「はい、次。早く」
次に席を立ったのは、
「・・・・・アル、です」
「アル？」
アルという名前の人（？）。
（和樹。アル・・・・・・は人間か？）
（ぁ・・・・・俺もよく分かんないけど、宇宙人らしい）
（宇宙人！？）
和樹と小声で話す。・・・・・・・・・・・・・・
・・・宇宙人って、・・・・・・・えと、アレ？あの、宇宙人・・・・
・・。
「あぁ、うん。宜しく」
「・・・・・」
会話に困った時に、先生が言った。
「それじゃあ、中野君は小野君の隣の席で」
「あ、はい。分かりました」
和樹の隣の空いた席に座る。・・・・・・どうせなら泉か琴音の
隣がよかったな。
「それじゃあ授業始めるわよ！数学の教科書・・・・・・」
授業が始まった。隣で色葉が大人しく聞いていた。
少しおかしな学校だけど、これなら上手くやっていけそうだな。
そんな事を思いながら、授業を受けていた。
―――こうして、僕は普通じゃない日常の中に入っていった。

## 学校

超常学園に通い初めてからもう1週間になる。いつもの道を歩いていると、和樹が来た。
「おっはよー翔太と色葉ちゃんっ」
「ああ、おはよう和樹。今日も元気だな」
「おはよう小野」
和樹とは家が近いので、待ち合わせて一緒に行っている。これは、いつもの事。今日も和樹は朝からテンションが高い。これも、いつもの事。
「でさぁ、色葉ちゃん。今度遊びに行かない？」
「断る」
色葉を遊びに誘おうとして断られるのも、いつもの事。
学校へと続く長い長い坂の前の道から、泉が来た。
「・・・・・・あら、奇遇ね。おはよう」
泉は、嬉しそうな顔をしている。
「おはよう、泉」
「おはよう原」
「おっはよー泉♪」
なぜか和樹は、泉のことはちゃん付けしない。
「和樹君、今日は菜穂ちゃんいないの？」
「あの子は神出鬼没だからねぇ～。今はどっか行っちゃった」
「へぇ・・・・・・」
なんだか泉、少し嬉しそう。もしかして・・・・・・？
「泉、ちょっといいかな」「いいわよ」
泉だけを呼んで聞いてみる。
「泉って、和樹の事、好き？」
「ふぇっ！？」
泉の顔がどんどん赤くなってゆく。これって当たり？

「ちちち違うわよっ！！私が和樹君の事、好きな訳ないわよっ」
これは当たりだ。
「ふぅーん？好きなんだ」
「だ、だからっ、違うわよ！！」
うろたえる泉。そうそう、和樹は外見は良い方だ。性格も悪くはない・・・・・・と思う。泉が好きになるのも仕方がないのかもしれない。
「なになに、なんの話ー？」
近づいてきた和樹。
「な、なんでもないよ！行こっ」
会話を断ち切り、また歩きだす。二人もついてきた。

「おっ、はろはろー」
歩いていると、七穂に会った。
「おはよう七穂」
「はろはろーっ（笑）」
「あ、おはよう」
「おはよう神崎」
皆で挨拶をする。すると、
「委員長じゃん！顔赤いよー？どしたのぉ」
「な、なんでもないわよっ、行きましょう遅刻するわよ！」
泉は話をそらした。また歩きだす。今度は七穂も一緒に。

学校に着いた。靴を履き替え、教室へ向かう。
「んぉ、奈央先生」
「ホントだ」
廊下に奈央先生がいた。こっちに気付いた様子はない。和樹が近づく。
「奈央先生、おはようございます！って・・・・・・」

奈央先生は、窓を閉めようとしていた。奈央先生は小柄なので、高い窓には届かなかったのだろう。
「んしょ、んしょっ！」
いくら背伸びしても届かない。
「奈央先生・・・・・・俺やりますよ？」
「ん？って、和樹君？おはよう。窓に届かないのよ・・・・・・やってくれるの
？」
可愛く首を傾げる奈央先生。表情は、なんだか悲しそう。
「大丈夫ですよ」
和樹は、背伸びもしないで窓を閉め、ついでに鍵も閉める。和樹の身長は１７０ｃｍはあるだろう。
そんな和樹を泉が赤い顔で見ていた。
「ありがとう、和樹君」
「や、別にいいですよ」
和樹がこっちに戻ってくる。
「さ、行こ行こ」
歩きだし、渡り廊下を渡って階段を上って教室に入った。

一時間目の後の休み時間に、和樹に話し掛けられた。
「なぁ、翔太は部活何やるのか決まった？」
話題は部活の話のようだ。
「いや、何も決めてないけど。和樹は何部？」
「俺はサッカー部。ポジションはＭＦ」
「へぇ。他の人達は？」
気になったので聞いてみる。
「泉が吹奏楽部。パートはクラリネット。ピッタリな気がする（笑）。慶介は野球部。確か、ピッチャーだった気がする・・・・・・。雅は俺と同じサッカー部。ポジションはＦＷ。七穂はテニス部で、

琴音は文芸部。アルは入ってないみたいだ」
「ふぅーん・・・・・・。入っても入らなくてもいいの？」
できるだけ部活はやりたくなかったので聞いてみた。和樹は、
「や、違う。アルだけだ」「え？」
意味のわからない事を言った。
「どういうこと？」
「アルって宇宙人だろ？だから色々あるんじゃないのか」
「へぇ・・・・・・」
納得。
前の学校で文芸部（らしきもの）に入っていたので、それにしようかと思い考えていると、
「翔太、今文芸部に入ろうと思っただろ」
「うぇっ！？」
しまった、変な声がぁ！
「図星かぁ～。だよな、お前琴音ちゃんに一目惚れだもんな～」
「だからそれは誤解だって！ただ、単純に前の学校で文芸部（？）に入ってたから！」
「ふぅーん。あぁ、相談部」
「そう、相談部」
和樹が前の部活動の名前を言う。
相談部は、悩み事などを相談する部だ。相談が無いときは、部室にあった本をよんでいた。昔は文芸部だったらしい。おかげで、本が好きになった。
「相談部の部長さん、美人だよな～。まだ連絡とりあってんの？」
「いや。先輩、携帯もってないから」
「機械音痴なの？」
「らしいよ」
先輩は機械音痴だ。パソコンも使えないらしい。
「んで？どうすんの、部活」
和樹が急に話を戻す。いけない、忘れるところだった。

「僕は文芸部に入るよ。本当に、琴音は関係ないからねっ」
一応釘をさしておく。
「そっかそっか。翔太も素直じゃないなぁ」
聞こえない聞こえない。無視。

キーンコーン・・・・・、休み時間終了の鐘が鳴った。皆急いで席につく。すぐにガラガラ、と音をたてて扉が開いた。先生が入ってくる。
「皆、教科書は出ているかしら？次は世界史よ」
世界史は、僕の国語の次に得意な教科だ。どうやら僕は文系らしい。
「先生ー、教科書忘れましたー・・・・・」
「マイナス１０、と・・・・・」
和樹が教科書を忘れたらしい。先生がノートに何か書き込んでいた。
「翔太ー、教科書見せてくれー」
和樹とは席が隣なので、仕方がないので見せるとする。
「今日は３７ページ・・・・・」
授業が始まった。

全ての授業が終わり、放課後になった。
入部届けを出しに職員室へ向かう。途中で、今日日直だった慶介とあったので、一緒に行く。
「翔太はさ」
「うん」
話し掛けてきたので返す。何の話かな・・・・・。
「好きな奴いんの？」
「へっ？」
あ・・・・・、変な声が・・・・・。
「あ、いるんだ」

「いないよ・・・・・・・」
「嘘」
「本当だよ」
「だって琴音のことよく見てるじゃねーか」
あれ？見てましたたっけ？
「それは誤解です！」
「つまんねーの」
・・・・・・。
「あ、慶介は好きな人いるの？」
「俺は七穂一筋だもーん」
「へぇ・・・・・・」
七穂か。僕の七穂の第一印象、“元気”“活発”なんだけど。慶介は元気な子が好みなのかな？
「ん、着いたぞー」
その時、職員室に着いた。
「どうぞ、先生」
「あら、ありがとう、お疲れ様」
「はーい、さよーならー」
慶介が山中先生に日誌を渡し、先生がそれを受け取る。
慶介が職員室から出ていった。
「それで、中野君は？部活、決まったのかしら」
「はい。文芸部に入部します。入部届をいただきに来ました」
そう言うと、先生は机の引き出しから入部届を出して渡してくれた。
「じゃあ、書いたら西村先生に渡してね。今中学3年生の先生だから」
「分かりました。えっと、そこの机使っていいですか？」
近くにあった机を指差す。
「いいわよ。それじゃあ、私はこれで」
「はい、ありがとうございます、さようなら」

先生が、職員室から出ていった。
入部届を書いて、西村先生に渡しに行った。

## 文芸部

西村先生に渡しに行った後、文芸部の部室に行った。文芸部の部室は、南館の隅の方にある。
扉をノックして返事を待つ。すると、
「はぁーい、どうぞお入りくださーい」
と声がした。
・・・・・・なんかいやな予感がするんだけど、気のせいかな？
中に入ると、古い本の匂いがした。木の机の前に置いてあるパイプ椅子に座っているのは、髪の長い人だった。
「いらっしゃい。入部希望者よね？話は聞いているわよ」
その人は、まるで前から知っていたかのように言った。
「はい。高2の中野翔太です」
「翔太君ね。はいはーい」
その人は、ノートに何か書き込んでいる。多分、部員のことが書いてあるノートだと思う。
「私は、高校三年生の松浦麗華よ。麗華先輩と呼んでいいわよ。文芸部の部長です！！」
麗華先輩は長い髪を揺らして言った。
「はぁ・・・・・・・宜しくお願いします」
「本当はもう一人、部員がいるのだけど。今は図書室に行ってるわ」
多分、いや絶対琴音の事だろう。
麗華先輩は僕の後ろを見て、言った。
「あら・・・・・・その子は」
「悪魔の色葉だ」
「色葉ちゃん。宜しくね」
僕が応える前に簡単に自己紹介をした色葉に、麗華先輩は優しく微笑んだ。

それからしばらくの間、本の話をした。普段はどんな本を読むのとか、私は「ダフニスとクロエー」が好きなのよといった話。
そうして話していたら、部室の扉が開いた。
「・・・・・・翔太君」
琴音だった。

琴音は驚いたような顔をしたが、文芸部に入部したことを話すと、嬉しそうに笑った。部員が少なくて困っていたらしい。
それから皆で帰った。下校時刻が迫ってたから。
帰る前に、麗華先輩イチオシの本を借りた。題名は「友情」、作者は武者小路実篤。「友情」は家に帰って、宿題が終わってから読もうかな。

家に帰って、数学の問題集を二ページやってから、麗華先輩に借りた「友情」を読む。
話は、野島という２０代の人が、友人の早川の妹の杉子に恋をする話だ。野島には大宮という親友がいて、杉子は彼を好きになるのだ。
表現が少し難しいけど、結構面白い。前の部活でも本を読んでいたけれど、「友情」は読んでいなかった。野島が杉子の家でピンポンをする場面を読んだ所で眠くなったので、そのページに花の模様の栞を挟んで本を置いた。
それから、ベットに入って眠った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8296q/

僕の隣の悪魔

2011年4月7日11時25分発行